

## 第131回 岡山外科会

日 時：平成8年10月27日（日）10時より

場 所：西大寺ふれあいセンター ふれあいホール（2階）

会 長：那 須 亨 二

（平成8年12月19日受稿）

### 1. 小児上腕骨外顆骨折の長期成績

岡山済生会総合病院整形外科 難波 良文 今谷 潤也 長野 博志  
林 正典 守 都 義明

上腕骨外顆骨折術後5年以上経過し、骨成長終了後の18例18関節（男16例16関節、女2例2関節）の長期成績を検討した。6例6関節に魚尾変形を認めたが、その他は、全て関節面の適合性は良かった。全例 carrying angle の左右差はな

かった。また、伸展制限の傾向があったが、機能的には全例優であった。外顆骨折は、一時期低成長となるが、旺盛なりモデリングのため、最終的に、良い成績が得られると考えられた。

### 2. 徒手整復不能であったリスフラン関節脱臼骨折の1例

岡山労災病院整形外科 梶谷 充 花川 志郎 大茂 寿久  
宮地 健  
水永病院整形外科 水 永 弘 司

前脛骨筋腱の介在によって徒手整復不能であったリスフラン関節脱臼骨折の1例を経験したので報告する。

症例は29歳、男性。3mの高さから飛び降りた際に、右足尖部について着地し受傷した。徒

手整復不能であり、観血的整復内固定術を施行した。前脛骨筋腱は第1中足骨と第1楔状骨に付着しているが、第1中足骨の外側脱臼に伴い腱が縦割され第1と第2楔状骨との間に嵌入していたため整復不能であった。

### 3. 高齢者大腿骨転子部骨折に対する $\gamma$ 釘固定法の小経験

岡山西大寺病院整形外科 守屋 有二 那須 亨二 梶木 美樹  
高取 和 弘

平成6年4月から平成8年6月までの期間に $\gamma$ 釘固定を行った転子部骨折48例について調査した。 $\gamma$ 釘は閉鎖式内固定のため感染・出血が少なく、早期離床が可能である。また、不安定型骨折、転子下逆斜骨折、高位転子下骨折の内固定

に有効であるが、カットアウト・外側皮質骨折等の合併症も経験した。適応を厳密にし、注意深く手術を行えば、 $\gamma$ ネイルは高齢者転子部骨折の良い治療法と考える。

#### 4. 頭部外傷を伴った四肢骨折の治療経験

岡山大学医学部整形外科 吉 鷹 輝 仁 佐 藤 徹 佐々木和浩  
井 上 一  
光生病院整形外科 秋 山 明 三  
同脳神経外科 鎌 田 一 郎  
大田記念病院脳神経外科 大 田 浩 右

頭部外傷を合併した四肢骨折15例についてその治療と問題点を報告する。症例は男性8名、女性7名。骨折形態としては開放性3例、閉鎖性12例であった。骨折に対する治療としては14例に対し、観血的治療を行った。受傷～手術ま

での日数は0～27日、平均15日であった。この中で脂肪塞栓を来した例などがみられた。文献的にも今回の例からも受傷後早期の強固な四肢骨折の固定が有効でないかと考えられる。

#### 5. Massive Osteolysis の1例

岡山大学医学部整形外科 檀 浦 智 幸 杉 原 進 介 尾 崎 敏 文  
井 上 一  
岡山大学付属病院病理部 田 口 孝 爾

Massive Osteolysis は非常に稀な腫瘍性疾患で、骨内の腫瘍の増殖に伴う進行性の骨破壊が生じ、広範な骨陰影の消失という特徴的なX線所見を示す。今回我々はその1症例を経験したので報告する。症例は44歳女性。主訴は左股関

節痛。単純X線像で、左寛骨の全体的な消失像を示し、病理組織ではリンパ管腫と診断された。治療は合計40 Gyの放射線照射を行った。治療後4か月の現在、病態の進行は停止している。

#### 6. 頸髄 AVM に対するクリッピングの1例

国立岡山病院整形外科 山 内 太 郎 田 中 雅 人 末 長 敢  
中 原 進 之 介

AVM に対する治療法を選択する際に考慮すべき点として、自然経過、臨床症状、AVM のタイプや部位、feeder やdrainer の外科解剖、正常脊髄との関係、治療法のリスクなどがあげられる。一般的に用いられている治療法として

主に、人工塞栓術と手術療法とがあるが、今回我々は、塞栓術の困難な症例に対してクリッピング法を行い、有効な方法の1つであると考えられた。

#### 7. 3 DCT が有用であった眼窩及び頭蓋骨陥凹骨折の1例

水島中央病院脳神経外科 白 川 武 志 秋 岡 達 郎 市 川 智 継

症例は、31歳、女性。右前頭部を強打し、挫創受傷、救急車で搬入。初診時、意識障害（I-3）、右動眼神経麻痺あり。頭部単純写で右前頭部陥凹骨折を認め、頭蓋形成及び硬膜形成術施行、右顔面の一部に知覚鈍麻の領域あり、へ

リカルスキャンによる眼窩3 DCT 施行、眼窩上縁、下縁及び頬骨弓に骨折線を認め、また、頭蓋形成術後の評価にも3 DCT を施行し、その有用性について報告した。

## 8. 脊髄動静脈瘻の1例

岡山大学脳神経外科 大同 茂 栗山 充夫 中嶋 裕之  
浅利 正二 大本 堯史

症例は15歳男性。安静時の突然の腰痛にて発症。その後頭痛、発熱も出現し、髄液検査で血性髄液を認めた。MRIで異常を認めたため当科紹介となり、血管造影にて Spinal AVM (intradural perimedullary type) と診断され

た。この症例に対し、酢酸セルロースポリマーによる経動脈的塞栓術を施行した結果、動静脈瘻は消失した。腰痛の原因疾患として稀なものであり文献的な考察を加えて報告した。

## 9. Bentall 手術4年後に腹部大動脈瘤破裂をきたした Marfan 症候群の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 武本 麻美 稲田 洋 村上 泰治  
正木 久男 森田 一郎 福廣 吉晃  
田淵 篤 石田 敦久 菊川 大樹  
遠藤 浩一 藤原 巍

患者は27歳男性で、4年前に Bentall 手術を施行、今回腹痛、腰痛をきたした。腹部に圧痛を伴う拍動性腫瘤を、腹部超音波検査で腹部大動脈瘤を認めた。緊急手術を施行、最大径6cmの紡錘状の腎動脈下腹部大動脈瘤を認め、後壁

に約2cmの破裂孔を認めた。Dacron 製人工血管を用いて腎動脈下腹部大動脈と両側総腸骨動脈間で置換し、下腸間膜動脈も再建した。大動脈瘤壁の病理組織学的所見は Marfan 症候群に一致するものであった。

## 10. 術後著明な改善を認めた高度肺高血圧を伴う動脈管開存症の1成人例

心臓病センター榊原病院心臓血管外科 古川 博史 畑 隆登 津島 義正  
松本 三明 濱中 莊平 吉鷹 秀範  
藤原 恒太郎 黒木 慶一郎 塩田 善逸  
榊原 宣

症例は40歳、男性。幼少時より心雑音指摘されるも放置。平成7年11月より心不全症状出現。動脈管開存症、高度肺高血圧症の診断にて心臓カテーテル検査施行。肺高血圧は酸素負荷にて左-右シャント率の減少と肺体血流比の上昇

を認め手術可能と判断し、平成8年4月4日人工心肺下に動脈管閉鎖術を施行した。術後肺高血圧は NTG や PGE<sub>1</sub>、PGI<sub>2</sub> 使用下に著明な改善を認め術後6ヶ月で正常化を認めた。現在外来にて経過観察中。

## 11. 心筋梗塞後乳頭筋断裂に対する僧帽弁形成術

国立岡山病院心臓血管外科 前谷 繁 山本 佳樹 藤田 邦雄  
谷崎 眞行

今回、我々は、急性心筋梗塞後の乳頭筋断裂によって発症した僧帽弁閉鎖不全症に対し、僧帽弁形成術を施行した。

症例は34歳、男性で、胸痛発作後、心エコー上、乳頭筋断裂による僧帽弁の逸脱を認め、又、

冠状動脈造影では、後側壁枝の閉塞を認めた。心不全症状も軽度であったため、断裂した乳頭筋とその支配領域の僧帽弁を切除し、僧帽弁形成術を施行した。

## 12. MRSA 感染により仮性動脈瘤を形成した大腿 — 大腿動脈バイパスの1例

岡山労災病院外科 宮口直之 間野正之 西英行  
 福田和馬 中西英博 大谷裕  
 小松原正吉  
 岡山大学医学部心臓血管外科 内田發三

移植人工血管の感染は治療に難渋する合併症であり、感染巣を迂回した新たな血行再建を行う必要がある。症例は62歳男性、糖尿病を合併したASOで大腿—大腿動脈バイパス術を施行した。4ヶ月後に左鼠径部にMRSAを起因菌

とする吻合部仮性動脈瘤を形成した。治療法として人工血管を抜去し、右外腸骨動脈より左閉鎖孔を通り左浅大腿動脈に至る経路でバイパス術を施行し、治癒せしめた症例を報告した。

## 13. 左肘部静脈瘤 (venous aneurysm) の1治療例

平病院外科 梅森君樹  
 岡山大学医学部心臓血管外科 内田發三

静脈瘤の上肢での発生は極めて稀である。今回、我々は左肘部静脈瘤の1例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は68歳女性。10年ぐらい前より左肘の無痛性腫瘤に気付いていたが放置。1996年8月19日当院受診。左肘中央部に2.3×2.5cm大の拍動の無い無痛性腫瘤を認め、静脈造影にて正中皮静脈に孤立性の囊状の拡張を認めた。9月2日局所麻酔下に瘤切除、正中皮静脈再建術を行った。摘出標本

の組織学的検索では静脈壁の厚さが不規則、不平等で最も薄い部分では中膜平滑筋の消失が認められた。患者は上肢の打撲、炎症の既往や動静脈瘻等はなく、炎症所見もないため病因不明とした。上肢静脈瘤は比較的稀であり、本邦報告例は自験例を含めて11例であった。合併症として瘤破裂や肺塞栓があり外科的手術の適応と考えられた。

## 14. 特発性血小板減少性紫斑病に合併した肺癌の手術例

岡山大学医学部第二外科 小林一泰 山下泰弘 渡辺啓太郎  
 岡部和倫 伊達洋至 安藤陽夫  
 清水信義

症例は52歳女性、特発性血小板減少性紫斑病(ITP)に肺癌を合併した症例を経験した。術前療法としてγ-globulin大量療法を行い摘脾術と肺癌根治術を一期的に行った。摘脾術の効果は約80%で持続性である。一方γ-globulin大

量療法の効果は一時的であるが術前に使用すれば効果的であり副作用も少ないことから、悪性腫瘍合併、ITP例でも安全にかつ一期的に手術が行えると考えられる。

## 15. 右肺上葉無形成に合併した右肺癌の1例

岡山大学医学部第一外科 高 篤 寛 年 井上文之 藤原俊義  
 田中紀章  
 中島病院 杉山 明

肺形成不全症は、比較的稀な疾患であるが、肺癌を契機に偶然発見された一例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。症例は62歳女性。現病歴は検診にて胸部レ線異常陰影を指摘され近医受診。諸検査にて肺癌を疑わ

れ、また、縦隔の右方変位気管支の分岐異常を指摘され精査手術目的にて当科紹介入院となった。結語。肺形成不全Ⅲ型と肺血管異常に合併した右下葉原発肺線癌にて全摘術を余儀なくされた症例を経験した。

## 16. 脳梗塞の原因となったと考えられる肺動静脈瘻の1例

岡山大学医学部第二外科 山野 寿久 青江 基 市場 晋吾  
山下 素弘 岡部 和倫 伊達 洋至  
安藤 陽夫 清水 信義

脳梗塞の原因となったと考えられる無症状の肺動静脈瘻を経験し、これに対して小開胸下に、動静脈瘻の流入動脈および流出静脈を結紮し、動静脈瘻を含めて、肺部分切除を行った。

肺動静脈瘻は無症状であっても、脳梗塞、脳

膿瘍、瘻破裂による血胸や咯血などの重篤な合併症の危険性があり、放置すれば予後は必ずしも良好とは言えず、積極的な治療が望ましいと思われた。

## 17. 成人で急性発症した先天性食道気管支瘻の1例

国立岡山病院呼吸器外科 小山 朋之 東 良平 小谷 一敏

先天性食道気管支瘻は比較的稀な症例で、幼少期より軽度の肺炎・胸部痛等の反復がよく見られるのが一般的だが、今回我々は、晩年まで全く既往なく突然発症した一例(Brainbridge 2

型)を経験したので報告する。手術は瘻孔の自動縫合器による切離と膿瘍を形成した肺罹患部の切除を行い、又、病理学的には瘻管に粘膜筋層が認められ先天性のものと証明された。

## 18. 胸腔鏡下に横隔膜部分切除を施行した月経随伴気胸の1例

岡山赤十字病院外科 渡辺 啓太郎 森山 重治 湯浅 一郎  
池田 英二 内藤 稔 辻 尚志  
古谷 四郎 名和 清人 小野 監作  
大塚 康吉

患者は、37歳女性、主訴は咳嗽、呼吸困難。既往歴3回気胸があり、過去の気胸と月経との関係は不明でした。5年前、腋窩開胸でブラ縫縮術を施行されていたが気胸が再発したため月経随伴性気胸も疑って胸腔鏡下に手術を施行し

た。胸腔鏡挿入時、横隔膜天頂部に黒色斑状病変があり、肝を透見できる5mm大の孔が開存しており、同部位を切除した。病理組織では横隔膜の壁内にヘモジデリンを含有する組織球の集簇と子宮内膜の上皮が腺腔を形成していた。

## 19. VRS を施行した慢性肺気腫24例の検討

岡山大学第二外科 遠藤 重人 伊達 洋至 山 中正 康  
市場 晋吾 青江 基 岡部 和倫  
山下 素弘 安藤 陽夫 清水 信義

目的：慢性肺気腫に対する Volume Reduction Surgery の安全性と効果を検討する。

方法：平成7年7月から平成8年8月までに当科で VRS を施行した慢性肺気腫患者24例を対象とした。男22例，女2例，平均年齢65歳，H-JⅢ° 13例，Ⅳ° 11例，うち14例が酸素療法を必要とした。術前リハ後平均1秒量733ml (510~1180ml)，全例術前，1カ月以上のリハビリを行った。VRSは，胸骨正中切開下に両側肺の一部を牛心膜と自動縫合器を使用して切除

する Cooper の方法に準じた。

結果：平均手術時間167分，平均出血量318ml，平均摘出肺重量110g。重篤な合併症，手術死亡はなく，自覚症状の改善を83%，酸素療法からの離脱を50%に認めた。術後は，FEV<sub>1</sub>，FEV<sub>1</sub> 1%，PaO<sub>2</sub>，6分間歩行距離の増加と TLC，PaCO<sub>2</sub>の減少を有意に認めた。

結語：VRSは，自・他覚症状，呼吸機能，動脈血ガス分析，耐運動能を，有意に改善し，死亡例はなく，安全な術式といえた。

## 20. 肺犬糸状虫症の1例

岡山赤十字病院	湯 浅 一 郎	森 山 重 治	渡 辺 啓 太 郎
	池 田 英 二	内 藤 稔	辻 尚 志
	古 谷 四 郎	名 和 清 人	小 野 監 作
	大 塚 康 吉		

症例は58歳，女性。主訴は呼吸困難，微熱。犬飼育歴なし。胸部X線，CTで右下肺野の結節影を指摘された。気管支鏡検査で確定診断がつかなかった。6月14日胸腔鏡下肺生検を施行した。S<sup>10</sup>の胸膜直下の腫瘤を楔状切除して術中

迅速病理に提出するも悪性所見はなかった。腫瘤の大きさは14×14mmで，病理組織所見では凝固壊死巣の血管内に dirofilaria とと思われる虫体が認められ，肺犬糸状虫症と診断した。

## 21. 胸骨に浸潤した甲状腺乳頭癌の1例

岡山大学第二外科	国 末 浩 範	庄 賀 一 彦	山 下 素 弘
	土 井 原 博 義	平 井 隆 二	安 藤 陽 夫
	曾 我 浩 之	清 水 信 義	

胸骨に浸潤した完全型縦隔内甲状腺癌の1例を経験した。完全型縦隔内甲状腺癌は比較的まれで本邦報告例は自験例を含めて18例のみであ

った。また胸骨に浸潤したものは報告がなく非常にめずらしい症例と思われた。

## 22. メッシュプラグ法による鼠径ヘルニア治療の経験

岡山市立市民病院外科	寺 本 淳 泉	貞 言	松 前 大
	戸 田 完 治		

鼠径ヘルニア初回手術例の約10%が再発しており，その原因は縫合部にかかる tension であると考えられている。我々は最近，市販されている Marlex Mesh Plug を用いた tension-free

のヘルニア修復術を経験し良好な成績を得ている。本法は再発率および合併症の減少，手術手技の簡素化，手術時間の短縮などの利点がある優れた術式である。

## 23. 虫垂原発 mucinous cystadenocarcinoma の1例

岡山大学第一外科 濱田 円 猶本良夫 齋藤信也  
 松野 剛 上川康明 田中紀章  
 町立熊山病院内科 内藤 紘彦

67歳女性の虫垂粘液嚢胞腺癌を経験した。血行性、リンパ行性転移は稀、嚢腫の破裂で腹膜偽粘液腫に陥る等、腺癌とは取り扱いが異なる

が、我々の症例は腹腔内に粘液の貯留無く、根治的に切除しえたため予後良好と考えられた。

## 24. 経肛門的減圧にて一期的手術を施行し得た直腸癌の1例

津山中央病院外科 光岡直志 宮島孝直 瀬下 賢  
 多胡卓治 林 同輔 向井晃太  
 黒瀬通弘 徳田直彦

大腸癌によるイレウスは、しばしば経験されるが、その治療にはイレウスの解除と癌の治療という2つの問題がある。従来よりイレウスの解除を目的として人工肛門が造設されてきたが、今回我々は、経肛門的減圧により、待期的に一

期的根治手術を施行し得た1例を報告した。経肛門的減圧法の欠点として、手技実施困難な例が多いことが挙げられるが、手技の向上、器具の開発により、更に有効な症例が期待できると思われた。

## 25. 脾臓に発生した類上皮嚢胞の1例

岡山大学医学部第一外科 山野武寿 齋藤信也 上川康明  
 田中紀章

脾原発の Epidermoid cyst は検索し得た限りでは、過去5年間和文の報告を認めないような稀な疾患である。症例は11歳の女児にて、US, CT, MRI を術前に施行し、その結果 Epidermoid cyst の診断にて脾摘を行った。術後良好に経過

し退院当日脾摘後重症感染症予防目的にて肺炎球菌ワクチン接種し退院となった。この稀な疾患について小児の脾摘の適応等を併せて検討、報告した。

## 26. VATS マーカーを使用しての肝小病巣に対する肝部分切除術

岡山大学医学部第一外科 渡辺貴紀 津下 宏 田中紀章  
 同放射線科 金澤 右 安井光太郎 平木祥夫

最近の画像診断は肝の小病変を発見することを可能にした。これらの小病巣を切除する際に術中 echo を用いることがあるが、結節化の進んだ肝硬変肝では小病巣を発見することが困難なことが多い。小病巣の切除の為に何回も部分切除を余儀なくされることがある。そこで今回我々はリビオドールCTでのみ確認できる肝小病巣の切除術前に VATS marker を用いることを試みた。その結果、次のような結論が得られた。

1. 術中 echo 等を用いても確認しづらい肝小病巣の切除において VATS marker は非常に有用であった。
2. 今回使用した VATS marker は糸が細く、目立たない色であり、確認するのが難しかったが、今後糸の色を変えたり、術中に echo 等を併用したりという工夫をすれば肝切除術において VATS marker の応用は広がると思われた。

## 27. 門脈再建に大伏在静脈を用いた肝門部胆管癌の1例

国立岡山病院外科 秋山一郎 小橋雄一 野村修一  
佐々木澄治  
同心臓血管外科 谷崎眞行

肝・胆道系腫瘍に対して門脈合併切除を行った場合、通常、再建血管には門脈との口径差の少ない外腸骨静脈を用いることが多い。今回、我々は門脈再建に大伏在静脈を用いた肝門部胆

管癌の1例を経験した。口径差に対しては、大伏在静脈を短冊状に3枚張り合わせ対応した。門脈再建は狭窄・閉塞率の高い手術であるが、術後10ヶ月現在、経過良好である。

## 28. 外傷性脾損傷の2例

川崎医科大学消化器外科 山村真弘 今井博之 小沼英史  
久保添忠彦 伊木勝道 村上正和  
木元正利 山本康久 角田司

外傷性脾損傷の2例を経験した。1例は、IIIa型損傷で脾尾側切除、1例は、IIIb型損傷で末梢側脾空腸 Roux-Y 吻合 (Letton & Wilson

法)を行った。外傷性脾損傷が疑われた際には脾管断裂の有無を確認し直ちに治療を開始し、嚴重な経過観察が必要である。

## 29. 脾嚢胞性腫瘍の1例

川崎医科大学消化器外科 岡保夫 小沼英史 竹尾智行  
忠岡好之 岩本末治 木元正利  
山本康久 角田司

症例は36歳女性。自覚症状はなく人間ドックの超音波検査で脾尾部の腫瘍を発見され、脾粘液性嚢胞腺腫の診断で脾尾部脾臓合併切除術を施行した。血液中の腫瘍マーカーは全て正常で

あったが、嚢胞液中の CEA, CA 19-9 値はそれぞれ6785ng/ml, 140000u/mlと異常高値を示した。病理組織学的に粘液性嚢胞腺腫で悪性化は認めなかった。

## 30. 6年間観察し得た粘液産生脾腫瘍の1例

倉敷中央病院外科 三田敬二 高三秀成

粘液産生脾腫瘍の1例を報告する。症例は70歳男性。1985年より慢性脾炎にて経過観察中、1989年にCTで脾頭部に嚢胞形成を指摘された。1996年には心窩部痛強く嚢胞径も35mmと増大した。5月24日に幽門輪温存脾頭十二指腸切除施

行。粘液産生脾腫瘍は腺癌・腺腫・過形成が含まれ悪性度診断・治療方針決定は困難なことが多い。本症例もその1例であり若干の文献的考察を加えて報告する。



### 31. 無症候性膵微小内分泌腫瘍の1切除例

岡山大学医学部第一外科 南 一 司 森 雅 信 津 下 宏  
 稲 垣 優 吉 井 莊 哲 上 川 康 明  
 田 中 紀 章

症例は57歳男性。人間ドックの超音波検査にて膵体部に6mm大の腫瘍を発見された。自覚症状はなく、CT、MRIにて膵体部に造影される腫瘍像を認め、血管造影では7×6mm大の腫瘍濃染像を示し膵島腫瘍を疑われ、膵体尾部切除術

を施行。切除標本は膵体部に7×6×6mm大の結節を認め、組織学的に類円形核を有する多角形細胞が索状～偽腺管配列を示し、免疫染色ではグルカゴン、膵ポリペプチド陽性。無症候性膵内分泌腫瘍と考えられた。

### 32. 気胸治療中に偶然発見された膵尾部腫瘍の1例

岡山市立市民病院外科 泉 貞 言 寺 本 淳 松 前 大  
 戸 田 完 治  
 同病理 村 尾 烈

症例は34歳男性。気胸治療中に撮影したCTで偶然膵尾部に腫瘤影指摘された。腹部所見、血液検査異常なし。CT、MRI画像上solid cystic tumorと診断され膵尾部および脾摘出術施行した。組織学的にも同上の診断であったが一部膵

実質に浸潤が認められ low grade malignancy が示唆された。本腫瘍は女性好発で男性発生報告例は非常に少ない。今後は肝を中心とした再発 check が必要かと思われた。